

日本の伝統音楽には、さまざまな種類の、書かれた楽譜が存在する。本プロジェクトは、日本伝統音楽研究センターが所蔵する日本伝統音楽の楽譜を解読する作業を通じて、伝統音楽の未来の伝承に役に立つような、新しいかたちの楽譜の創造をめざすものである。

2018年度は、仏教音楽の楽譜に焦点をあてた。日本の仏教声楽（梵唄、現在は声明と呼ばれている）は、平安時代に中国から導入された。導入したのは比叡山の僧侶、慈覚大師である。もちろん慈覚大師は、中国（唐）の寺院で、中国の僧侶から梵唄を習って帰ってきた。そして同時に、その旋律を含む歌いぶりを記した、図形のような楽譜を、日本にもって帰ったと思われるが、確実なことはわからない。

その後、天台宗では、歌われる漢字それぞれの横に、簡単な横線を記した楽譜がひろく使われるようになっていった。線は、1つ1つの漢字を中心にして、漢字から遠い方向へとひろがっていく。漢字の四隅あるいは真右や真左などの位置から、放射状にひろがっていく線は、音の高さの動きがない場合には、一本の単純な直線で示される。音の高さが途中で変わる場合には、音程に応じて折れ曲がるかたちで伸びていくものである。そういった線は「博士」と呼ばれている。

時代がくぐると、楽譜は複雑になる。直線や折れ線の要所要所に、「宮、商、角、徴、羽」などの音の相対的な高さを表わす文字が書き入れられる。さらに、音の装飾的な旋律を表わす「ユリ（「揺る」の名詞形）」、「諸下り（モロオリ）」、などといった個別の名称が、線の傍に付加されていくようになって、声明の楽譜は飛躍的に進化した（図1）。

近代になって、おそらく西洋音楽の記譜法の影響だろうか、まったく新しいタイプの楽譜が創造された。回旋譜といわれる楽譜である（図2）。本来の楽譜と回旋譜との主な違いは、第一に、本来縦書きであった楽譜が横書きになったこと、第二に、これまでは「ユリ」「マクリ（「捲る」の名詞形）」「ソリ（「反る」の名詞形）」などの動詞で表現されていた装飾的な音の動きが、左から右へと流れて行くなめらかな曲線で表わされるようになったことである。現在、回旋譜は、旋律の流れをわかりやすく示す楽譜として、初心者の間では、必要不可欠の楽譜となっている。

回旋譜を実際に書いてみよう、そして歌ってみよう、という趣旨のイベントを、2018年7月15日、新研究棟の合同研究室1で行った（テーマ：「声明の回旋譜を書いて、唱えてみる」）。講師として、浄土真宗本願寺派の僧侶で西六条魚山会を主宰する大八木正雄氏をお迎えした。大八木氏には、声明を唱えながら、回旋譜を書いてもらうというデモンストレーションをお願いした。

回旋譜への置き換え作業をとおして、声明の声の質、息づかい、旋律の細やかな動きの作り方が効果的に理解できた。得られた知見は、能楽などの伝統的な声楽の楽譜の新たな創造にも応用できそうである。  
藤田 隆則（日本伝統音楽研究センター教授）

図

図2